

セミヨン・イヴァーノフは鉄道の線路番をやっていた。その番小屋から一方の駅までは十四キロ、もうひとつの駅までは——十二キロあった。四キロばかり離れたところに去年大きな紡績工場ができた。森陰からその高い煙突がくろくろと見えていたが、それより近くには、両隣りの番小屋のほかには、人の住み家ひとつなかった。

セミヨン・イヴァーノフは病身の、生活に打ちひしがれた男だった。九年前に戦争にいられたことがある。ある将校のもとに従軍を勤めて、彼と共に遠征の苦難をなめたのであった。飢えに悩まされ、寒さにこごえ、太陽に照りつけられて、またその炎熱や寒気をついて、日に四十キロも五十キロもの行軍をしたのであった。弾丸の下に身をさらしたこともあったが、ありがたいことにかすり傷ひとつ負わなかった。あるときのこと連隊が第一線に立ったことがある。まる一週間ものあいだトルコ軍との交戦がつづいた。味方の戦線がある、くぼ地ひとつへだてると——トルコ軍の戦線だ。そして朝から晩まで弾丸を打ってよこすのだ。セミヨンの将校もその戦線にいた。毎日セミヨンは三度三度連隊の炊事場から、谷間から、熱いサモワールと食事を彼のところへ運ぶのだった。サモワールを持って暴露地帯を歩いていくと、弾丸がひゅうんひゅうんとうな

って、石をびしびしと打つ。セミヨンはこわくて、思わず声を立てて泣くが、それでも歩いていく。将校連は彼に大満足だった。いつでも彼らのところには熱いお茶があったからである。彼は遠征から無事に帰ってきたが、ただ手足が痛むようになった。それからというもの、彼のなめた苦労は並みだいていものではなかった。家に帰ってみると——年とった父親は亡くなっていた。せがれも四つの年で——やはり死んでいた。咽喉をわずらったのだ。セミヨンは女房とたったふたりき

りになってしまった。暮らし向きもうまういかなかった。それに第一むくんだ手足で土地を耕すのは容易なことではなかった。とうとう自分の村にはいたたまれなくなつて、新しい土地にいいことをさがしに出掛けることになった。セミヨーンは女房をつれて国境地方にもいつてみたり、ヘルソーンにも、ドン地方にも立ち寄つて見たが、どこにいつてもいいことはなかった。とうとう女房は下女奉公に出て、セミヨーンは相も変わらず流れ歩いてた。あるときのこと汽車に乗つて旅をしたことがあったが、とある駅で、ふとみると、どうやら駅長の顔に見覚えがある。その顔をじろじろとセミヨーンが見ていると、駅長のほうでもやはりセミヨーンの顔をじつと見ている。お互いに思い当たつた。同じ連隊の将校だったのである。

「おまえはイヴァノフじゃないか？」と声をかける。

「そうであります、旦那様。その私なのであります」

「なんだってこんなところにやつてきたんだね？」

セミヨーンは彼にこれこれしかじかと物語つた。

「それでこれからどこへいくんだ？」

「自分は知らないであります、旦那様」

「どうしたつてんだ、ばか、知らないだなんて？」

「まったくそのとおりなんです、旦那様どこにもいなくところがないからなんです」

駅長は彼の顔をながめ、ちよつと考へていたが、やがていつた。

「何が仕事を、旦那様、見つけなければならぬいんです」

「こうしたらどうだね、おまえ、さしあたりこの駅に残ることにしちゃ。おまえはたしか女房持ちだったな？ おかみさんはどこにいるんだね？」

「そのとおりであります。旦那様、女房がおりますんで。かかあはクールスクの町で、商人の家に奉公に出ておりますんで」

「うんそうか、じゃおかみさんに手紙を出して、こちへくるようにいつてやれよ。無料乗車券のほうはなんとかしてやろう。この線路番の小屋がひとつあくことになつてゐるんだ。おまえのことをひとつ局長に申請してやろうよ」

「たいへんありがどうございませう、旦那様」とセミヨーンは答へた。

彼は駅に居残つた。駅長のところで勝手仕事を手伝つたり、薪を割つたり、構内やプラットホームを掃いたりした。二週間たつと女房がやつてきたので、セミヨーンは手動車に乗つて自分の番小屋にいつた。小屋は新しく、暖かで、薪は——いくらでもほしいだけであつたし、小さい野菜畑も前の線路番が残していつてくれたし、土地も耕地が半町歩ほど線路の両側にあつた。セミヨーンはすっかりうれしくなつていつた。畑仕事をやつてゐるところだとか、牝牛や馬を買つるところなどを、心に浮かべはじめたのだつた。

必要な物品はみんな支給された。青旗、赤旗、手さげランプ、呼子、ハンマー、ナットを締める——スパナ、金挺子、シャベル、鋸、ボルト、大釘など、それに規則の書いてあるうすつぺらな本が二冊と、列車時間表がわたされた。はじめのうちセミヨーンは夜の目もねずに、時間表をすつかりさらつて暗記した。列車がくるまでまだ二時間もあるというのに、自分の受持ち区域をひとつめく

りして、番小屋の前のベンチに腰をおろして、線路が震動してはいないか、汽車の音はしないかと、絶えずながめたり、耳をすましたりするのであつた。規則もすつかりそらんじていつた。読むほうは不調法で、どうかにかこうにか綴りをたどりたどり読むのであつたが、とにかくそらんじていつた。

夏のことだつた。仕事は楽だつた。雪をかくこともいらなかつた。それにこの線は列車の数も少なかつたので、セミヨーンは一昼夜に二度ずつその受持ち区域を見まわつては、そここのナットをあつてみたり、締めあげたり、砂利をならしたり、水道管のぐあいを見たりして、それがすむと畑仕事をやりに戻つてくるのだつた。ところが畑仕事には厄介なことがひとつあつた。それは、何をしようと思つても、いちいち線路工監督のところまでうかがいをつけてなければならぬことだつた。すると監督は局長に取り次ぐというわけである。そこで願いが許されて戻つてくる時分には、時季が過ぎてしまふのだつた。セミヨーンも、女房もそろそろ退屈しだすようになってきた。

ふた月ほど過ぎた。セミヨーンは両隣の線路番と近づきになるようになった。ひとりはおぼよぼの爺さんで、当局ではかねてから代えてしまひたいと思つていつた。彼は番小屋からほとんど外に出ることもなかつた。おかみさんが代わりに見まわりをしていつた。駅に近いほうの小屋の主は、若い、やせこけて筋張つた男だつた。セミヨーンがその男とはじめて顔を合わせたのは、見まわりのときのことだ、小屋と小屋との中ほどの線路の上でいつた。セミヨーンは帽子をとつてお辭儀をした。

「ごきげんよろしゅう、お隣りさん」といつた。

隣りの男はじろりと横目で彼を見た。

「こんちは」といつた。

そしてくるりと背中を向けると、さつさと向こうへいつていつた。そのあとで女房同士も顔を合わせた。セミヨーンの女房のアリーナは隣りのおかみさんと挨拶をかわしたが、これもやはりあんまり話をしようとしなかつた。いつていつた。あるときのこと、セミヨーンは彼女を見かけた。

「なんだつて、おかみさん、あなたんこのご主人は無口な人ですかねえ？」

女房はちよつとだまつていつたが、やがて口を開いた。

「でもおまえさんとあの人がなんで話すことがあるのさ？ だれだつて自分の……、さつさとおいきよ」

そんなことがあつたけれども、ひと月ほどたつとふたりは近づきになつた。セミヨーンはヴァンリーイと線路の上で落ち合つと、線路へりに腰をおろして、互いにパイプをふかしながら、めいめいにその暮らし向きのことを話すのだつた。ヴァンリーイは口をつぐんでゐることが多く、セミヨーンが自分の村のことや、遠征のことなどを話して聞かせるのだつた。

「えらくおれも」と彼はいつた。「いままで苦勞をなめてきたもんさ。それにもう若い先も長いこたあねえんだ。つまりしあわせを授けられなかつたというわけさ。いつたん神様が人にある運勢をお授けになると、もうそのとおりに決まつてしまふんだ。そんなもんだよ、なあ、ヴァンリーイ・スチエバーヌイッチ」

するとヴァンリーイ・スチエバーヌイッチは、ぼんとパイプを線路の端でたいて、立ちあがつ

ていうのだ。

「なにも運勢がおれたちの一生を台無しにするんじゃないやねえ、人間どもなんだ。この世の中に、人間ほど強欲で性の悪い獣はありゃしねえよ。狼は共食いなんかしねえけど、人間ときたら生き身のまんま人間を食いやがるんだからなあ」

「ええ、兄弟、狼は共食いをやるぜ。そんなことあいつもんじゃないやねえよ」

「ひょっと調子で口に出たもんだから、いったままでよ。まあどっちにしろ、人間くれえむでたらしい生き物はいねえぜ。これで人間の性悪と貪欲とがなくなりさすりゃ——暮らしを立てることもできたというもんよ。どいつもこいつも手めえを生きたまんまで引つつかまえてくれようと狙っていやがるんだ。肉を引き裂いてくらってやろうとしてるんだ」

セミヨーンは考えこんでしまった。

「おれにはわかんねえよ、兄弟」と彼はいう、「もしかしらたらそんなもんかもしんねえ。けどもしそうだとしても、それが神様の思召しなのよ」

「そうだとすりゃあ」とヴァシーリイはいう、「なにもおめえと話すこともいらねえわけだ。糞おもしろくもねえことは、みんな神様に背負いこませて、手めえはすわりこんでだまって我慢してるなんてえのは、そりゃ、兄弟、人間になるんじゃないやなくて畜生になるってことじゃねえか。おれのいてえのはそのことよ」

くるりと背中を向けて、挨拶もしないでさっさと行ってしまった。セミヨーンは立ちあがった。「お隣りさん」と声をかけた、「なんだっておまえさんは悪態をつくんだね？」

隣りの男は振り向きもせずに行ってしまった。長いことセミヨーンはヴァシーリイの姿が切り通しの曲がりかどに見えなくなるまで、じっと見送っていた。

家に戻ってくると女房にいった。

「なあ、アリーナ、おれらの隣りのやつときたら、ありゃねじけ者だぜ、とても人間じゃねえや」だがふたりは仲たがいをしてしまったのではなかった、また顔を合わせて、前のように話をかわすようになった。話は相変わらず同じことについてだった。

「ええ、兄弟、もしも人間どもが……じゃなかったら、おたげえにこんな番小屋なんぞにくすぶってねえでもよかったんだぜ」とヴァシーリイがいった。

「番小屋に住むのがどうだっていうんだね……いいじゃねえか、結構住めるぜ」

「住める、住めるか……えっ、なんてんだ、おめえは！ 長えこと暮らしちゃきたが、いっこう世間を知らねえんだね。いろんなことを見ちゃきたが、さっぱり気がついてないわねえんだ。貧乏人にはここらの番小屋に住もうと住むまいと、いったいどんな暮らしがあるってんだい！ 人食い共が手めえを食ってるんだぜ。うめえ汁をすっかり搾っちゃって、おめえが老いぼれてくると、——油粕かなにかを豚の餌にくれてやるみたいにおっぼり出してしまふのよ。給料はおめえいくらもらってるんだい？」

「うん、たいしたことないよ、ヴァシーリイ・ステューパーミッチ。十二ループリさ」

「おれは十三ループリと半よ。そこでおうかがいしてえんだが、こりゃいったいどうしてだね？ 規則によれば、中央からは一律にくれることになってるんだぜ。月に十五ループリ、それに暖房料

と明かり代さ。じゃだれがいったい、おめえには十二ループリとかおれには十三ループリと半だなんて決めたんだね？ おうかがいしたいもんだよ……だのおめえときたら、住めるだなんていうんだからな！ こりゃなあ、なにも一ループリ半だとか、三ループリだとかってことを、とやかくいってるんじゃないやねえんだぜ。まるまる十五ループリくれたところで同じことなのよ。おれや先月、停車場にいったことがあったがね、局長がちょうど、とおりがかったものさ。それでまあおれはそれを見たんだけど。まあ拝ましてもらったというわけよ。特別仕立ての客車に乗ってきやがってさ。プラットフォームにおりてきて、立ってやがるんだ……。いやまあ、おれあ長いことここに残っちゃいないよ。足の向いたほうへ、去っちゃうんだ」

「どこへ去っちゃうんだね、ステューパーミッチ？ 宝の山を離れて、宝をさがすことはないよ。ここにはおまえ家もあるし、暖かいし、地面だって少しはあるからな。それにおまえんこのおかみさんは働きのんだしき……」

「地面だって！ まあおれんこの地面を見てからにしてくんな。小枝ひとつはえてやしねえんだ。春にヤキャベツを植えたんだけど、するてえと監督の野郎がきやがってさ、『こりゃいったいどうしたこった？』ていいうやがるんだ、『上申もしないでどうしたんだ？ 許可も得もしないでどういうわけだ？ 根こそぎ跡を残さずに掘り返しちゃえ』酔っ払っていやがんださ。そうでなければなんにもいいやしないのさ。だけどそんなときにゃ思いつきやがったもんだ……、『三ループリの罰金だ！……』ってね」

ヴァシーリイはちよっと口をつぐむと、パイプをふた吸い三吸いしたが、やがて小声でいった。

「すんでのところで、あいつを死ぬほど痛めつけてやるとこだったよ」

「だけどもまあ、お隣りさん、おまえさんは気短すぎるよ、まったく」

「気短なんじゃねえ、おれは正しいことをいったり、考えたりするだけのことよ。まあそのうちに見てるがいいや、赤っ面め。局長のところじかにいつつけてやるとも、いまに見やがれ！」

それでそのとおり彼はいつつけたのだった。

あるとき局長が線路の検分に来たことがあった。三日のちに、ペテルブルクのお歴々がこの線を通ることになっていた。検閲をするということだった。そこで一行がやってくる前に万事きちんとしておかなければならなかったのだ。道床を撤き足し、平らにならし、枕木をいちいち調べ、大釘をしっかりと打ちなおし、ナットを締め直し、枕は塗りかえた。踏み切りには黄色い砂を撤き足すようにとお達しだった。隣りの線路番のおかみさんまでが、例の爺さんを草むしりに追ったてるほどの騒ぎだった。セミヨーンはまる一週間というものの働きのとおしだった。なにもかもすっかりきちんと片づけると、自分の長上衣のほころびも縫い、きれいにブラシをかけた。真鍮の記章のほうは煉瓦でもって、ぴかぴかに光るまで磨きあげた。ヴァシーリイも働いた。局長は軌道車に乗ってやってきた。四人の工夫がハンドルをまわし、歯車がぶんぶんうなっていた。その車は一時間二十五キロもふつとぶので、ただもう車輪が咆るばかりだった。セミヨーンの番小屋のところにすっとなってきた。セミヨーンはとんで出て、軍隊式に報告をした。セミヨーンの番小屋のところにす

「おまえはもう長いことここにおるのかね？」と局長はたずねた。

「五月の二日からあります」
 「よろしい。いやありがとう。ところで百六十四番の小屋はだれかな？」
 線路工場の監督が（彼に随行して軌道車に乗ってきたのだ）答えた。
 「ヴァシーリイ・スピリドノフでございます」
 「スピリドノフ、スピリドノフと……。あ、それは去年君のところで注意人物になっていた、あの男かな？」
 「その男でございます」
 「ふむ、よろしい。ヴァシーリイ・スピリドノフを見ることにしよう。出発！」
 工夫たちはハンドルにとりついた。軌道車は動き出した。セミョーンは車を見送りながら考えた。

「こりや隣りのやつとひと騒動もちあがるぞ」
 二時間ばかりしてから、彼は見まわりに出かけた。見ると、切りどおしのところから線路つたいにだれたかやってくるものがある。頭のあたりになにやら白いものが見えるようだ。セミョーンがよくよく目を凝らして見ると——ヴァシーリイだった。杖を片手に、背中に小さな包みを背負い、片頬には布切れが巻きつけられていた。
 「お隣りさん、どこへお出かけだね？」セミョーンが大声をあげた。
 ヴァシーリイはつい鼻先へ近づいてきた。彼はまるで顔色がなく、白墨のように白く、あらあらしく、獣のような目つきだった。口をきき出した——声はつかえがちだった。

「町へいくんだ」と彼はいった。「モスクワへいくんだよ……本省へさ」
 「本省へ……うん、そうか！ 訴えに、つまり、いくんだな？ よしなよ、ヴァシーリイ・スチエバーヌイッチ、忘れちまえよ……」
 「いや、兄弟、忘れやしねえ。忘れるにはもう手おくれなんだ。なあ、見ねえ、あいつはおれの顔をなぐりやがったんだ。血が出るほどやりやがったんだ。おれが生きてるうちは忘れるこっちゃねえ。このままにはしておかねえんだ！」
 セミョーンは彼の手をとった。
 「よしなよ、スチエバーヌイッチ。おれは間違ったことはいわねえ。そんなことはしねえほうがいいんだよ」
 「何が悪いことがあるもんか！ しないほうがいいくらいのことばも承知だい。おめえのいった運勢のことはありや本当のこった。そりや自分の身のためにやしねえほうがいいんだが、正義の側に、兄弟、立たなけりやならないんだよ」
 「だけど、いってみなよ、どうしてまたそういうことになったんだい？」
 「うん、どうして……。なにからなに見やがったんだよ。軌道車からおりてきて小屋ん中までのぞきこみやがったんさ。おれもやかましく聞きやがるだろうとは覚悟してんだ。だから万事ぬけぬきちんとしておいたのよ。でもこれで出発というときに、おれが訴え出たという寸法よ。あいつはいきなりどなりつけたもんだ。『政府の検閲だ』というのに、『いいんだ、』なんてやつだ貴様は、畑のことなんぞで訴え出るなんて！ ここにゃ、』っていうのさ、『三等官の方々が

おられるっていうのに、貴様はキャベツのことなんかで口をつつこむのか！』でおれは腹にすえかねて、ひとこといったんだ。それもべつにたいしたこじやなかつたんだけど、やつにはきつと気にさわったんだ。いきなりやつはなぐりつけてきやがった……だけどおれはじっと立っていたんだ、まるでそれが当たりまえのこじやうによ。あいつらがいつちまうと、おれははっとわれに返って、顔のよごれを洗い落とすと、こうして出てきてしまったのよ」
 「で小屋のほうはどうなるんだい？」
 「かかあが残ってるよ。へまをやることもなかるうよ。それにやつらがどうなるうと、やつらの線路がどうなるうと、おれの知ったことかい！」
 ヴァシーリイは立ちあがって、いこうとした。

「あばよ、イヴァースニッチ。聞きとどけてもらえるかどうかはわかんねえけれどなあ」
 「まさか歩いていくんじやないだらうね？」
 「駅にいて乗っけてもらうつもりよ、あすになりやモスクワだ」
 隣り同士は別れた。ヴァシーリイはいつてしまった。そして長いこと彼は姿をあらわさなかった。女房が彼の代わりに働いていた。昼も夜も寝なかつた。夫の帰のを待ちわびて、すっかり弱り果ててしまった。三日目に検閲の一行が通過した。機関車と手荷物車が二両、それに一等車が二両だった。だがヴァシーリイの姿はまだ見えなかつた。四日目にセミョーンは彼のおかみさんを見かけた。顔を涙で泣きはらし、目はまっ赤だった。

「旦那は戻ってきたかね？」とたずねた。
 女房は片手を振っただけで、何もいわずに、自分の小屋のほうにいつてしまった。

セミョーンはいつのころか、まだがんぜない子供の時分に、猿柳で笛をつくることを覚えた。猿柳の芯を焼きぬいて、穴を、しかるべきところに錐であけ、一方の端に歌口をこしらえると、うまいぐあいに音色をととのえて、お好み次第の曲が吹けるようになるのだった。役目の暇々に彼はそうした笛をたくさんつくっては、懇意な貨物列車の車掌に頼んで、町の市場へ出してもらっていた。そこでは一本について二カペークずつくれるのだった。検閲があつてから三日目のこと、夕方六時の列車の見張りには女房を家へ残して、自分は小刀をもって、杖を切り森へ出かけた。自分の受持ち区域の外れまでくると——そこで線路は急カーブをしていた——彼は土手をおりて、林つたいに山裾へおりていつた。五百メートルばかりいつたところに大きな沼地があつて、そのほとりに例の笛におあつらえむきのすばらしい藪がはえていた。ひと抱えほどの枝を切ると、彼は家路へいつた。林の中を歩いていく。日はもう低く傾いて、あたりは死んだような静けさ。聞こえるのはただ、チチとさえずる小鳥の声と、枯枝が足もとでなる音だけだった。セミョーンは少しばかり先に進んだ。もうすぐ線路だ。ふと何やらまだほかに聞こえてくるような気がした。どこかそらで鉄と鉄と打ち合わせているところではなかつた。『これはいつたどうしたこじやう？』と心に思った。森の外れに彼が出てみると——目の前に鉄道の土手がたかど横たわっていた。線路の上

「よしなよ、スチエバーヌイッチ。おれは間違ったことはいわねえ。そんなことはしねえほうがいいんだよ」
 「何が悪いことがあるもんか！ しないほうがいいくらいのことばも承知だい。おめえのいった運勢のことはありや本当のこった。そりや自分の身のためにやしねえほうがいいんだが、正義の側に、兄弟、立たなけりやならないんだよ」
 「だけど、いってみなよ、どうしてまたそういうことになったんだい？」
 「うん、どうして……。なにからなに見やがったんだよ。軌道車からおりてきて小屋ん中までのぞきこみやがったんさ。おれもやかましく聞きやがるだろうとは覚悟してんだ。だから万事ぬけぬきちんとしておいたのよ。でもこれで出発というときに、おれが訴え出たという寸法よ。あいつはいきなりどなりつけたもんだ。『政府の検閲だ』というのに、『いいんだ、』なんてやつだ貴様は、畑のことなんぞで訴え出るなんて！ ここにゃ、』っていうのさ、『三等官の方々が

に、ひとりの男がうずくまって、何やらやつている。セミョーンはそつとその男のほうへ登つてい

った。だれかがナットを盗みにやってきたんだな、と思ったのだ。見ると——男もやがて立ちあがった。手には金挺子をにぎっている。レールをわきに動かすように、金挺子でもってレールをひっかけていたのだ。セミーンは目の前がまっ暗になってしまった。喚こうとしたが——できない。それがヴァンリーだと知ると、彼はいっさんに駆けあがったが、相手は金挺子とスパナーを手にしたまま、土手の向こう側をまりのようにころげおろしてしまった。

「ヴァンリー・スチュエパー・スイッチ！ 後生だ、おい、戻ってこいよ！ 金挺子をよこせ！ レールをなおそうよ、だれも気がつきやしない。戻ってこいよ、畜生道に落ちないようにしろよ！」

ヴァンリーは振り向いても見ず、森の中に逃げこんでしまった。

セミーンは外されたレールの上に立った。例の枝の束をどざりと落とした。くるのは貨物列車ではなくて客車なのだ。それなのに停車させるものにならなかった。旗がないのだ。レールを元どおりにすることはできないのだ。素手で犬釘を打つわけにやいかない。駆けていくよりほかはない。何か道具をとりはどうしても小屋まで駆けつけていくよりほかはない。神様、お助けください！

セミーンは自分の小屋をさして走った。息が切れる。それでも走る——もういまにも倒れそうになる。森は駆けぬけた——小屋までは百メートルばかり、それ以上ってことはない。ふと耳をすますと——工場の汽笛がぼうと鳴った。六時だ。六時二分には列車がとおるんだ。ああ神様！ 罪のない魂をお救いください！ と思うセミーンの目の前にまざまざと浮かびあがる。機関車の左

の車輪がレールの切れ目にひっかかる。ぐらぐらとひと揺れ、ぐつと傾く、枕木を引き裂いて、木っ葉みじんにつっとぼす。おまけにこは斜面だ、カーブだ、それに土手だ。三十メートルもまっさかさまにころげ落ちる。ところであの、三等車には、ぎっしりと旅客がすし詰めだ。いたいけな子どもたち……、それがみんなすわっているんだ、なんにも考えないで。神様、どうかいい知恵をお授けください！ いいやだめだ、小屋まで駆けていって、間に合うように戻ることとはとてもできやしない……。

セミーンは小屋までいかずに、あとへと引き返した。前よりもっと速く駆け出した。ほとんど無我夢中で駆けた。その先どうなることやら、自分でも知らなかった。外されたレールのところまで駆けつけた。例の枝がうずたかく散らばっていた。彼は身をかがめてその一本をひつつかむと、なんのためか自分でもわからぬままに、さきへ駆け出した。もう列車のくるような音がする。はるかに汽笛の音が聞こえた。耳をすますと、レールがかすかに規則正しい調子で震え出した。もうそれ以上先に走りぬける力はない。彼はあの恐ろしいところから百メートルばかりのところ立ち止まった。そこでふと彼の頭にひと筋の光明がさつと閃きかけたのであった。彼は帽子をぬいだその中から木綿のハンカチーフを取り出した。長靴の胴革から小刀をぬき出すと、十字を切った。主よ祝福を垂れたまえ！

小刀をいきなり左の腕の、肘より少し高めのところ突き刺した。血潮がさつとほとばしって熱い流れをなして走った。その中にそのハンカチーフをひたして、ひろげてしわをのぼすと、枝に縛りつけてその赤い旗をさつとかがけた。



その旗を打ち振りながら、彼は立っていた。列車の姿がもう見えた。機関手には彼の姿が見えぬとみえて、どんどん近づいてくる。だが百メートルの距離では、あの重い列車を止めることは思いもよらない！

一方血はどんどんほとばしる。セミーンは傷口を脇腹に押しつけて、口をふさごうとするのだが、血はいっこうに止まらない。どうやら腕を深く切りこんだらしい。目がまわってきた。目の前に黒いような斑がちらつきはじめた。が、やがてまっ暗になってしまった。耳ががんと鳴る。もう汽車の姿も目にはいられなければ、響きも聞かえない。頭の中にはたつたひとつの考えが渦まいてる。もう立ってはいられない。倒れる。そして旗を落すことす、汽車がおれを轢いていく……お助けください、神様、代わりをよこして……。

そうして目の前が暗くなり、その心は空になって、思わず旗を取り落とした。だが血にしみた旗は地面に落ちなかった。何者かの手がそれをつかみ取ると、近づく列車に向かって高々と振りあげたのだ。機関手はそれを認めて、調節器の弁を閉じて、蒸気を止めた。列車は止まった。車からどやどやと人がとび出し、黒山のように集まった。見ると全身血まみれの男が、気を失って倒れている。もうひとりそのそばに血だらけの布切れのついた棒を手にして、男がたたずんでいる。

ヴァンリーはぐるりと人々を見まわすと、そのままうなだれてしまった。「あつしを縛ってください」といった。「あつしがレールを外したんです」

⑦

バシーリ ステパニッチ マイ ディア フレンド カム バック ギブ ミー ザ クロウバー ウィ ウィル プット ザ レイル バック
 ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □
¹"Vasily Stepanych! My dear friend, (come) back! ²(Give) me the crow-bar. ³We (will put) the rail back;
 バシーリ・ステパニッチ 私の親友よ 来い 戻って くれ 私に その鉄槌子(かなてこ) 俺たち 戻すんだ レール 元に

ノウ ワン ウィル ノウ カム バック セイブ ユア ソウル フロム スィン
 □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □
⁴no one (will know). ⁵(Come) back! ⁶(Save) your soul [from sin]!"
 ゼロの人 知るだろう 来い 戻って 救え 御前の魂 罪から

バツ(ト) バシーリ デイド ノット ルック バック アン(ド) ディスアピアード イントゥ ザ ウッズ
 ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □
⁷But Vasily (did) not (look) back ⁸and (disappeared) [into the woods].
 しかし バシーリ した ない 見る 振り返って そして 姿を消した 森の中に

⑧

セミーオン ストゥ(ド) ビフォア ザ レイル ホウィッチ ハ(ド) ビーン トーン アップ ヒ スルー ダウン ヒズ バンドル オブ スティクス
 ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □
¹Semyon (stood) [before the rail ²[(which) (had been torn) up]. ³He (threw) down his bundle [of sticks].
 セミーオン 立っていた レールの前に (それは) 外されていた 彼は 投げ出した 彼の束 棒されの

ア トレイン ワズ デュー ノット ア フレイト バツア パッセンジャートレイン アン(ド) ヒー ハッド ナッシング ウィズ ホウィッチ トゥ ストップ イット
 ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □
⁴A train (was) due; ⁵not a freight, but a passenger-train. ⁶And he (had) nothing ⁷[with (which) [to (stop) it,
 列車 だった 到着するはず ない 貨車 しかし 客車 そして 彼は 持っていた ゼロのもの それによって 列車を止める

ノウ フラッグ ヒー クッド ノット リプレイス ザ レイル アン(ド) クッド ノット(ト)ドゥライヴ イン ザ スパイクス ウィズ ヒズ ベア ハンズ
 □ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □
⁸no flag. ⁹He (could) not (replace) the rail ¹⁰and (could) not (drive) in the spikes ^{10'}[with his bare hands].
 ゼロの旗 彼は できた ない 取り替える レール また できた ない 打ち込む 犬釘 素手で

イット ワズ ネCESSサリ トゥ ラン アブソルートルィ ネCESSサリ トゥ ラン トゥ ザ ハット フォ サム ツールズ ゴッド ヘルプ
 ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □
¹¹It (was) necessary [to (run)], ¹²absolutely necessary ^{12'}[to (run)] [to the hut] [for some tools]. ¹³"God (help)
 それ あった 必要な 走ること 絶対に 必要な 小屋へ走ること 道具を取りに 神よ 救い給え

ミー ヒー マーマード
 ・ □ ・ □ ・ □ ・ □
 me!" ¹⁴he (murmured).
 私を 彼は つぶやいた

1+2

6+7

〈略歴〉

ロシアのエカテリノスラフ県（現在のウクライナ領）に生まれる。貴族であった父などの影響で、幼年期からトルストイなどのロシア古典文学を始め、ユーゴーやチェルヌイシエフスキーの著作に親しんだ。

一八六三年、ガルシンはペテルブルクに転居し、地元中学校へ通った。このころから精神疾患に悩まされるようになり、生涯にわたりガルシンを苦しめた。

中学を卒業後、工業専門学校に通っていたガルシンは、一八七七年に開戦した露土戦争が激しくなると従軍を志願してブルガリアなどに赴いた。この戦地での経験や取材を元に、『四日間』や『戦争情景』などの作品を書き上げた。

一八八三年に医学生生のナジェージダ・ニコラエヴナと結婚。同時期にガルシンは妻の名を題にした『ナジェージダ・ニコラエヴナ』を書き上げた。しかしこの頃、精神疾患の症状が悪化したため、この頃に書かれた作品の数は少ない。

一八八八年、コーカサスに転地療養する直前に飛び降り自殺を図った。その際の怪我が致命傷となり、同年四月五日に永眠。

〈作品について〉

精神病にたびたび悩まされ、三三歳と言う若さで自殺したため、ガルシンが生涯に残した作品は二十作品程度しかない。

初期の作品は、自らの戦争体験にもとづいたものが多い。また学生時代には画家のヴェレシチャーギンらとも交流があり、美術評論も数作著している。

戦場からペテルブルクに戻った一八七七年から一八八〇年にかけては、ガルシンが創作に没頭することができた時期で、『邂逅』『従卒と士官』『画家たち』『アッターレア・プリンケプス』など、この頃に書かれた作品も多い。

しかしその後、精神疾患の発作に悩まされ、精神病院で療養する日々を送った。この時期に書かれた作品として、『あかい花』『夢がたり』が挙げられる。また歴史小説を執筆する計画もあり、資料の収集などを行っていたが、ガルシンの死によりこれは実現に至らなかった。『信号』は一八八七年に発表

日本では、二葉亭四迷や神西清などが翻訳し、その著作を紹介した。プーシキンとともに、太宰治が傾倒した作家としても知られる。

参照：ウィキペディア 一部加筆



ガルシン 1855-1888

〈略歴〉

ロシアのエカテリノスラフ県（現在のウクライナ領）に生まれる。貴族であった父などの影響で、幼年期からトルストイなどのロシア古典文学を始め、ユーゴーやチエルヌイシエフスキーの著作に親しんだ。

一八六三年、ガルシンはペテルブルクに転居し、地元中学校へ通った。このころから精神疾患に悩まされるようになり、生涯にわたりガルシンを苦しめた。

中学を卒業後、工業専門学校に通っていたガルシンは、一八七七年に開戦した露土戦争が激しくなると従軍を志願してブルガリアなどに赴いた。この戦地での経験や取材を元に、『四日間』や『戦争情景』などの作品を書き上げた。

一八八三年に医学生生のナジェージダ・ニコラエヴナと結婚。同時期にガルシンは妻の名を題にした『ナジェージダ・ニコラエヴナ』を書き上げた。しかしこの頃、精神疾患の症状が悪化したため、この頃に書かれた作品の数は少ない。

一八八八年、コーカサスに転地療養する直前に飛び降り自殺を図った。その際の怪我が致命傷となり、同年四月五日に永眠。

〈作品について〉

精神病にたびたび悩まされ、三三歳と言う若さで自殺したため、ガルシンが生涯に残した作品は二十作品程度しかない。

初期の作品は、自らの戦争体験にもとづいたものが多い。また学生時代には画家のヴェレシチャーギンらとも交流があり、美術評論も数作著している。

戦場からペテルブルクに戻った一八七七年から一八八〇年にかけては、ガルシンが創作に没頭することができた時期で、『邂逅』『従卒と士官』『画家たち』『アッターレア・プリンケプス』など、この頃に書かれた作品も多い。

しかしその後、精神疾患の発作に悩まされ、精神病院で療養する日々を送った。この時期に書かれた作品として、『あかい花』『夢がたり』が挙げられる。また歴史小説を執筆する計画もあり、資料の収集などを行っていたが、ガルシンの死によりこれは実現に至らなかった。『信号』は一八八七年に発表

日本では、二葉亭四迷や神西清などが翻訳し、その著作を紹介した。プーシキンとともに、太宰治が傾倒した作家としても知られる。

参照：ウィキペディア 一部加筆



ガルシン 1855-1888

1

「なにも運勢がおれたちの一生を台無しにするんじゃねえ。人間どもなんだ。」
「気短なんじゃねえ。おれは正しいことをいったり考えたりするだけのことよ。」

① 今の私たちが生きているこの時代にもあてはまると思った。② 自分よりも地位の上の人や組織が正しくないことをしていても、下の身分の人が「おかしい、間違っている」と言っても相手にされないことがあるからだ。(田山奈美)

① このバシーリの言葉は [私たちが生きている] 現代に (もあてはまる)。
These words of Vasily we live in of the present days are also true

②-1 [自分よりも地位が上の] 人や組織が ^{sometimes} ときには正しくないことを (している)。
whose position is higher than us The people and system the wrong do

②-2 ところが、[下の身分の人が 「それは間違っている」と (言った)] としても
But the lower class people "It is not right." say, even if

②-3 彼らは その言葉を (無視することがある)。
they the words sometimes ignore

2

The train came to a standstill. (列車は止まった。)

① このシーンを訳し終わったとき、セミヨンや列車の人たちが助かってよかった
と思ったと同時に、誰がセミヨンの代わりに旗を振って列車を止めたのだろうと思
いました。② 訳しながら続きが気になったところです。(嘉比誠太)

①-1 [私は [このシーンの] 訳を (終わった)] とき、
I of this scene the translation finished When

①-2 私は [[セミヨンや列車の人たちが (助かった)] こと] が (わかり)] (ほっとした)。
I Semyon and the people on the train were saved that to know was relieved

At the same time,

①-3 同時に、私は [誰が [セミヨンの代わりに] 旗を (振ったのだろう)] (と思った)。
I who instead of Semyon the flag waved thought

② ここでは、私は [話の] 続きが (とても気になった)。
Here I of the story about the next part was very curious

3

"God bless me!" と叫んだ後で、He buried the knife in his left arm above the elbow. とある。

① 「切った」ではなく、「埋めた」という表現から、セミヨーンの何としても列車を止めたいという気持ちが表れていると思う。② 普通なら手とかを軽く刺して血を出すくらいしか怖くてできません。(村中友哉)

①-1 [この文では] [「切った」ではなく、「埋めた」という] 表現が (使われている)。

In this sentence, of not "cut" but "buried" an expression is used

①-2 この表現は [何としても列車を止めるという] セミヨーンの気持ちを (表わしている)。

This expression to stop the train at any cost Semyon's feeling shows

② 普通の人なら 怖くて 手を 軽く (切るくらいしかできない)。

Ordinary people with fear their hand lightly could only cut

Then Vasily of "Come back!" to the call turned back though went away
⑤ そのとき バシーリは [[「戻ってこい」の] 呼びかけに] 振り返った] もの (逃げた)。
_____ () [_____ () [_____]]

Semyon what to do did not know
⑥-1 セミョーンは どうしたらいいか (分からなかった)。
_____ () _____

But at last by putting the knife into himself the train stop to decided
⑥-2 しかし、最後は、 [[自らにナイフを刺して] 列車を (止める)] こと を (決意した)。
しかし、最後は _____ () [_____] _____]]

Probably Vasily by his action was moved
⑦ おそらく バシーリは [この行動に] (心を打たれた) (のだろう)。
おそらく _____ () [_____]

But Semyon the blood-stained flag was about to drop by the time did not take action
⑧-1 しかし、 [セミョーンが 血に染まった旗を (落としそうになる)] まで (行動できなかった)。
しかし _____ () [_____ () _____]

That Vasily in his mind a conflict had because is
⑧-2 それは [バシーリが [心の中に] 葛藤を (持っていた)] から (だ)。
_____ () [_____ () _____] _____]]

the train stopped when Vasily "I broke the rail." confessed,
⑨ [列車が (止まった)] ときに バシーリは 「私がレールを壊した! 」と (自白した) 。
_____ () _____ [_____ ()]

At that time Vasily two feelings had
⑩-1 このとき バシーリは 2つの感情を (背負っていた) 。
_____ () _____

One to Semyon gave trouble many innocent people tried to kill that a guilty feeling is
⑩-2 ひとつは、[[セミヨンに] (迷惑をかけ) 、多くの無関係な人を (殺そうとした)] という 罪悪感で (ある) 。
_____ () _____ [_____ ()] [_____ ()] そして () _____]
* and

The other the prison would go into that a determination is
⑩-3 もうひとつは、[刑務所に (入る)] という 覚悟で (ある) 。
_____ () _____ [_____ ()] _____]
*

5

<問4> この物語のいちばん訴えたかったこと (=主題) は何だと思いますか。自分自身の体験と重ね合わせて考えてみてください。

① 今の世の中は権力とお金を持っている上の人があることだけを考えている独裁状態になっている。② その世の中を変えようとするものと逆らわずに流れのままに生きるものがあるが、人はどちらの道を選ぶことが正しいのか、ということが主題だと思いました。③ 自分は中学生の時に反抗期のまただ中で自分の考えが正しいと思っており、親や学校の先生など上の人にかみついていた時がありましたが、今に思えば、自分が間違っていたと思いますが、後悔はしていません。④ 自分がおかしいと思ったことに疑問を持ち意見することは大切なことだと思うからです。⑤ バシーリのような勇気を持ち人の意見に流されることなく生きていこうと思いました。
(屋照武寿)

The present world in an autocratic state is

①-1 今の世の中は 独裁状態に (なっている)。

It who have power and money the elite of only themselves are thinking because is

①-2 それは [[権力とお金を持っている] 上の人が 自分のことだけを (考えている)] から (だ)。

Some people the world try to change

②-1 ある人は その世の中を (変えようとする)。

And others without any resistance live

②-2 また ある人は [逆らわずに流れのままに] (生きる)。

Which way is right to choose of this story the theme is

②-3 どちらの道を選ぶことが正しいのかということ が [この物語の] 主題 (だ)。

I in my junior high school days of resistance age in the midst was
③-1 自分は [中学生の時には] [反抗期の] まっただ中 (だった)。

my thinking (is) right that thought against my parents and teachers resisted
③-2 [自分の考えが 正しい] と (思っており)、 親や学校の先生に (かみついていた)。
* I *and

[Looking back now,] I wrong was that think ,but do not regret
③-3 [今に思えば、] [自分が 間違っ (ていた)] と (思います) が、 (後悔はしていません)。
* I * I

Because about what I think is wrong doubts have say my opinion to important is
④ なぜなら、[[自分がおかしいと思ったことに 疑問を (持ち)、(意見する)] ことは 大切なこと (だ) (から)。
*and

like Vasily courage will have without not being influenced by others will live that thought
⑤ [[バシーリのような 勇気を (持ち)、[人の意見に流されることなく] (生きていこう)] と (思いました)。
* I *and * I

学部	学科	学年	クラス	学籍番号	氏	採点
経営	経営	1				

科目名 英語
担当者 山田 純

一課題一
カリコこの信号

<問1>「いた人神様が人にある運勢をお授けになると、そうそのとおりに決まってしまうんだ」と結構往めるせ、「室の山を離れて、室をさかすことはない。ここにはおま家もあるし、暖かい、地面だって少しはあるからな。これにおま人とこのおかみさんは働かそんたしてさ……」このことからセシオン・イヴァノフは人生は決められた通りにしか進まないと考え、保守的な楽観主義者である。これに対して、「運勢がおれたの一生を台無しにするんじゃねえ、人間」とどなれた。この世の中に、人間ほど強欲で性の悪い獣はありゃしねえよ。」と「人間の性悪と貪欲とかなくなりさえずりー暮らしを立てることそできたというもんよ。」「貧乏人にはこの番小屋に往もうと往むまいと、いったいとそな暮らしがあるんだい！人食い共か手ぬえを食、てるんだぜ。」「気短かじゃねえ。おまは正しいことまいたり、考えたりするたけのことよ。」このことからヴァシーリイ・スチュパーヌッチは人生は神に決められているのではなく人間が決めていると考え、革新的な悲観主義者である。セシオンは今の状態を変えることは望んでいないがヴァシーリイは今の状態が変わることを望んでいるという違いがあることが分かる。

<問2>上申(ないて)キャバツを植えたこと根こそぎ跡も残さずに掘り返された上に三レツの罰金を受けた。その後政府の検閲中にキャバツの件を訴え出たことにより血が出るほどなぐられた。

<問3> "Bind me. I tore up the rail!" 「私を縛、てくれ、私かレールを壊した！」
ヴァシーリイはレールを壊す前にモスクワにある本省へ訴えに行った。しかしヴァシーリイの望んだ返答を得られなかった。これに腹を立ててヴァシーリイは金槌子とスパナを使いレールをはずした。その場面を運悪くセシオンに見られてしまう。その時に「戻、てこい」の叫びかけに振り返り出したもののヴァシーリイは逃げた。セシオンは列車を止めるためにあたふたし、自分にナイフを刺してまで列車を止めようとした。おそらくヴァシーリイはセシオンのこの行動に心を打たれたのだと思う。セシオンが血に染まった旗を落としそうになるまで行動ができなかったのはヴァシーリイの心の中で葛藤があったからだと思う。そして列車が無事に止まった時にヴァシーリイは「私を縛、てくれ、私かレールを壊した！」と自白した。この時のヴァシーリイはセシオンに迷惑を掛け、多くの無関係な人を殺そうとした罪悪感と刑務所に入る覚悟の2つの感情を背負、いた。このように考えるとこの場面がいちば人印象に残った。

<問4> この物語がいつかは訴えたかったことは保守的な者が救われるということである。
私はセシオンのように決められた規則には仕方ないと割り切、て生活をしている。なのでヴァシーリイのように規則にかみかて自身の意見を伝えようとは全く思わない。しかし、時と場合によってはヴァシーリイの革新的な人がうらやましく思う。この物語では何も行動を起こさないう保守的な者が救われたが、現実では保守的な者が救われるとは限らない。

<問1> 英文1～17までを和訳しなさい。

1. Semyon (buried) the knife [in his left arm [above the elbow]];
セミョーン 埋めた ナイフ 彼の左腕に ひじの上の

2. the blood (spurted) out, and (flew) [in a hot stream].
血 吹き出た 外に 流れた 熱き流れとなって

3. [In this] he (soaked) his scarf, (smoothed) it out, (tied) it [to the stick] and (hung)
この中に 彼は 浸した 彼のスカーフ 伸ばした それ 広げて 結んだ それ 枝に そして 吊した

out this red flag.

彼の作った赤旗

4. He (stood) [waving] his flag].
彼は 立っていた 振りながら 彼の旗

5. The train (was) already [in sight].
列車 あった すでに 視野の中に

6. The driver (would) not [see] him— (would|come) close up,
運転手 だろう ない 見える 彼 だろう 来る ますます近づいて

7. and a heavy train (can|not|be pulled) up [in six hundred feet].
そして 重量のある列車 できる ない 止められる 完全には 六百フィート(180 m) の距離では

8. And the blood (kept) on flowing.
一方で 血 続けた 流れることを

9. Semyon (pressed) the sides [of the wound] together 10. so as [to close] it],
セミョーン 押さえた 両端 傷口の 合わせるように ~ために それをふさぐ

11. but the blood (did) not [diminish].
しかし 血 した ない 消える

12. Evidently he (had cut) his arm very deep. 13. His head (commenced) [to swim],
明らかに 彼は 切っていた 自分の腕 あまりに深く 彼の頭 始めた ふらつくこと

14. black spots (began) [to dance] [before his eyes], 15. and then it (became) dark.
黒い斑点 始めた ちらつくこと 彼の目の前を それから それ に変わった 真っ暗に

16. There (was) a ringing [in his ears].
(そこに) あった がんがん鳴る音 彼の耳の中に

17. He (could) not [see] the train or [hear] the noise.
彼は できた ない 見る 列車 あるいは 聞く その響き

<問2> 日本文の意味になるように英語を正しく並べかえなさい。

1. 運命が 人生を (台無しにするんじゃない)。 人間が そう (するんだ)。
Destiny one's life does not break Humans so do
2. このバシーリの言葉は [私たちが生きている] 現代に (もあてはまる)。
These words of Vasily we live in of the present days are also true
3. バシーリは [レールを(壊す)] 前に [[モスクワにある] 本省に] (行った)。
Vasily the rail broke before in Moscow to the ministry went he
4. しかし 彼は [自分が (望んだ)] 返答を (得られなかった)。
But he he wanted the reply did not get
5. バシーリは [[[「戻って来い」] の] 呼びかけに] (振り返った) [が] (逃げた)。
Vasily of "Come back!" to the call turned back though went away he
6. バシーリは [セミヨンが 旗を(落としそうになる)] まで (行動できなかった)。
Vasily Semyon the flag was about to drop until did not take action
7. [今の世の中は] [権力とお金を(持っている)] 者が 自分だけのことを (考えている)。
In this world who have power and money the people only of themselves are thinking
8. ある人は その世の中を (変えようとする)。 また ある人は [流れのままに] (生きる)。
Some people such world try to change And other people without resistance live
9. どちらの道を選ぶことが正しいのかが [この物語の] 主題 (である)。
Which way is right to choose of this story the theme is
10. 普通のひとなら 手を [軽く] (切るくらいしかできない)。
Ordinary people their hands lightly could only cut

<問3>は裏面にあります。

<問3> 以下の文と手引きを参考にして後期の授業で学んだことを整理しなさい。

後期の授業では 19 世紀ロシアの作家ガルシンが書いた『信号』という話を取り上げました。前半部分は日本語で読み、最後の四分の一を英語で読みました。

毎時間、英文を少しずつ読み進みましたが、その都度、和訳したところを音読・視写していきました。読み終わってからまとめのレポートを書いてもらい、その中の何人かの級友のレポートを元にして英作プリントを作成しました。それからは英訳の練習をしました。

和訳のときは、「センマルセン」を「センセンマル」に並べ換えましたが、英訳のときはその逆の語順変換を行いました。動詞 () の位置が変わりましたね。

① バシリーが 旗を (振った)。 → Vasily (waved) the flag .

また修飾する語と修飾される語の位置が変わることも大切なポイントでした。英語は後置修飾ですが、日本語は前置修飾になるからです。修飾する言葉を [] で示すと次のようになります。ただし、日本語でも英語でも [] は、被修飾語 _____ のすぐ側に置いておくことは共通しています。

② [話の] 続き → the next part [of the story]

ところが、同じ記号の [] を使っていても、動詞を説明する働きをするものもあります。この場合は必ずしも動詞のすぐ側に置く必要はありません。文末に置くことが多いですが、場合によっては文頭や動詞の直前に来ることもあります。以下の例文では、[反抗期の] は まっただ中 のすぐ前に、英語では [of resistance age] は in the midst のすぐ後ろに置く必要がありますが、[中学の時] は文頭でも文末でも構いません。

③ 私は [中学のとき] [反抗期の] まっただ中 (だった)。
→ I (was) in the midst [of resistance age] [in my junior high school days] . 文末
→ [In my junior high school days] I (was) in the midst [of resistance age] 文頭

最後に、文と文とをつなぐ言葉の位置についても見ておきましょう。この言葉は「連結詞」と呼び、記号では □ で表します。日本語では文の後に置きますが、英語では文頭に來ます。

④ [私たちが (抗議した)] としても、彼らは それを (無視する)。
→ Even if [we (resist)], they (ignore) it .

さて、ここまでで日本語から英語に直すときの重要な法則を 4 つ述べてきましたが、今度はあなたがその法則にあった例文を探す番です。<問2>の例文の中からその例を見つけだして抜き出ささい。例文の一部を抜き出してもかまいません。なるべくたくさん抜き出して下さい。抜き出した日本文、英文には必ず記号も付けておくように。

次に書くテーマは、後期に行った課題に自分がどのように取り組んだのかを記述することです。「フレーズ訳」「リズムよみ」「視写プリント」「まとめのレポート」「英作プリント」のそれぞれについて、どのように取り組んだか、どんなところで苦労したか、それをどのように乗り越えてきたのか、そしてどんな力を身につけたのか、何を学んだのか、等々——について自分の言葉でまとめてみましょう。

学籍番号 _____ 氏名 _____

日本文

センセンマル

① _____ ()
_____ [] ()

英文

センマルセン

_____ () _____
_____ () []

このバシーリの言葉は 現代に (あてはまる)。 → These words (are also true) of the present days.

→

→

→

→

② [] _____ 前置修飾 → _____ [] 後置修飾

[私たちが生きている] 現代 → the present days [we live in]

→

→

→

③ 動詞を修飾する []

[流れのままに] (生きる) → (live) [without rsistance]

→

④ [文] [] → [] [文]

[レールを壊す] [前に] → [before] [he broke the rail]

→

→

後期の課題への取り組みをふりかえって

